

藤壺の母呼称

——母としての立場から——

大竹 明香

はじめに

藤壺の呼称の大きな特徴といえは、「女」「女君」と呼ばれないことがまずあげられるであろう。作中一度も用いられておらず、このこと自体が彼女の理想性を描出していることは言うまでもないが、⁽¹⁾では、「母」の呼称はどうだろうか。冷泉の母である藤壺には、作中において全六例の母呼称を見出すことができるのだが、⁽²⁾藤壺に用いられる「母」との呼称には、どのような特徴があるのだろうか。

藤壺の母としてのあり方については、これまで様々に論じられてきた。⁽³⁾また、わが子についての思いを源氏への返歌に詠んだ「袖ぬる露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまとなでしこ」(紅葉賀①三三〇)の解釈は未だ決定されておらず、源氏の子を産んだ母としての藤壺の、その心の内をめぐる読みの問題などもある。⁽⁴⁾

このような藤壺の「母」の問題をめぐる論考では、母呼称につい

ての言及はほとんどないが、『源氏物語』における女性たちの「母」の呼称について、池田節子氏に詳細な論考がある。⁽⁵⁾池田氏は、『源氏物語』における「母」の呼称の特徴として、誰の母であるのかを示すために用いられることが多いとし、くわえて、作中に描かれる母に子との一体感がないこと、また男君たちが子を欲しているのに対して、女君たちが子を持つことに執着していないこと、さらには『源氏物語』作中の母たちの存在感が薄いことには、乳母の存在が大きく関わっていることを指摘する。また、母呼称の多い人物については、浮舟の母である中将の君が突出して多く、身分が高い人物は母呼称が少ないとし、たとえば、「藤壺五例、六条御息所三例などは、彼女たちの重要性を考えると、ほとんど「母」とは呼ばれないとさえいえよう」と述べる。

しかし、池田氏の論は『源氏物語』における様々な女性の「母」呼称一般についての論なので、個々の人物の母呼称がどのような場面で用いられているかという問題については、まだまだ検討の余地

があると考えられる。なぜなら、たとえば明石の君の母呼称は、子を養育する母の役割から疎外される明石の君について語る場面において用いられているなど、⁽⁶⁾作中においては、それぞれの人物に母呼称を用いる場面の特徴があると考えられるからである。

一 藤壺と冷泉帝

藤壺が冷泉帝と母子として交流している様子については、作中さほど多く語られているわけではないが、その一つとして、まずは賢木巻で出家を決意した藤壺が東宮に会いに行く場面を確認する。

A 宮はいみじうつくしうおとなびたまひて、めづらしううれしと思して睦れきこえたまふを、かなしと見たてまつりたまふにも、思し立つ筋はいと難けれど、内裏わたりを見たまふにつけても、世のありさまあはれにはかなく、移り変ることのみ多かり、大後の御心もいとわづらはしくて、かく出で入りたまはむにもはしたなく、事にふれて苦しければ、宮の御ためにもあやふくゆゆしうよろづにつけて思ほし乱れて、(中略)

御髪はゆらゆらときよらにて、まみのなつかしげににほひたまへるさま、おとなびたまふままに、ただかの御顔を抜きすべたまへり。御齒のすこし朽ちて、口の内黒みて、笑みたまへるかをりうつくしきは、女にて見たてまつらまほしうきよらなり。いとかうしもおぼえたまへるこそ心憂けれど、玉の瑕いぼに思さる

るも、世のわずらはしさのそら恐ろしうおぼえたまふなりけり。

(賢木② 一一四―一一六)

東宮は久方ぶりの藤壺との対面を嬉しく思うが、桐壺院亡き後の情勢は様変わりしていることを藤壺は感じ取り、「宮の御ため」⁽⁷⁾に危険な事態、つまり東宮が廢太子になることを危惧している。中略した叙述では、藤壺が東宮に対して久しく会わない間に自分の姿が変わっていったらどう思うかと尋ね、幼い東宮は、どうして年老いた女房のような姿になるというのか、と返す。そうではなくて髪を下ろし、僧のような衣を纏うようになったら、今よりもっと会えない日々が長くなるのだ、と藤壺は涙を流し、東宮も母が恋しいと涙する、母子の心の交流の様子が語られている。

さらには、東宮の容貌について「ただかの御顔」、つまり源氏の顔を抜きすべらせたように似ているとあり、女にして拝していたいと思うほど美しいともある。この「女にて見る」は、源氏の容貌を描出する際にも用いられるものであるから、ここでも二人は似ているとされる。父子の容貌の酷似はすなわち、父母の密事を表出する⁽⁸⁾先に見た、政治情勢による「宮の御ため」との意識にくわえて、ここでは、不義の露呈が東宮の立場を危うくする要因、つまり「瑕」であることを、藤壺は思うのである。

さて、ここで注目したのは、このAの藤壺と東宮母子の交流とその心中を語る叙述において、藤壺に「母」との呼称が見出せないことである。いったい、藤壺の母呼称は、どのような場面において

用いられているのだろうか。

二 藤壺の母呼称

藤壺の母呼称については、池田氏の表によると五例とあるが、『源氏物語評釈』『人物総覧』によれば母呼称は六例とある。以下に、藤壺の母呼称の全用例をあげる。

- ① 母宮をだに動きなきさまにしおきたてまつりて、強りにと思す
になむありける。
(紅葉賀①三四七)
 - ② 母宮をだにおほやけ方さまにと思しおきてしを、世のうさにた
へずかくなりたまひにたれば、……
(賢木②一三四)
 - ③ 母宮は、いみじうかたはらいたきことに、あいなく御心を尽く
したまふ。
(濔標②二八二)
 - ④ 「斎宮の女御をこそは、母宮も御後見と譲りきこえたまひしか
ば」と、……
(少女③三〇〇)
 - ⑤ 母后のおはしまさぬ御かはりの後見にとことよせて似つかはし
かるべくと、……
(少女③三二一)
 - ⑥ 「……当代の御母后と聞こえしと、この姫君の御容貌とをなむ、
『よき人とはこれをいふにやあらむとおぼゆる』と聞こえたま
ふ。……」
(玉鬘③一一三)
- これら藤壺の母呼称についての本文に大きな異同はない。藤壺に
はじめて「母」の呼称が認められるのは①、紅葉賀巻の巻末近く、

彼女の立后を語る叙述である。藤壺の出産はその年の春で、七月に
は立后がなる。

なお、池田氏は「母」の呼称について、宇治の中の君に「母」の
呼称が見られないことを例にあげて、母と呼ばれるのは、子が一定
の年齢に達した後からではないかと述べている。だが、①の紅葉賀
巻の藤壺のように、子が生後数ヶ月において用いられる例があるこ
とから、必ずしも子が一定の年齢に達した後ではないと思われる。

先に、藤壺と冷泉東宮母子の交流と、子の将来を案ずる母の心情
を語るAの場面において母呼称が用いられていないことを確認した
が、このAの場面に類似した藤壺の心内語が語られる別の場面には、
たとえば、濔標巻で冷泉帝が即位する直前に次のような叙述がある。

- ③ あくる年の二月に、春宮の御元服のことあり。十一になりたま
へど、ほどより大きにおとなしうきよらにて、ただ源氏の大納
言の御顔を二つにうつしたらむやうに見えたまふ。いとまばゆ
きまで光りあひたまへるを、世人めでたきものに聞こゆれど、
母宮は、いみじうかたはらいたきことに、あいなく御心を尽
くしたまふ。内裏にもめでたしと見たてまつりたまひて、世の
中譲りきこえたまふべきことなど、なつかしう聞こえ知らせた
まふ。
(濔標②二八一―二八二)

源氏が帰京し、東宮が元服、朱雀帝が譲位の意向を表わすなど、
新たな世が確実に近づいており、人々や朱雀帝は元服した東宮を「め
でたし」と評している。先にAで見た賢木巻の叙述にある、源氏と

東宮の容貌の酷似についての懸念が、ここでは「光りあひたまへる」とあり、人々が東宮を賛美する理由へと変わっていることがわかる。ただ一人、容貌の酷似の理由を知る藤壺の心中は穏やかではないのだが、この時、藤壺は母と呼ばれているのである。なぜだろうか。Aの場面とは異なり、この③の場面は、東宮の元服を語る公的なもの、政治について語るものである。藤壺が母と呼ばれるのは、この公的な立場や政治的な立場を表わす文脈と深く関わるのではないか。このことについて、詳しく検討したい。

三 後見役としての母

ここからは、藤壺の母呼称の用例を詳しく検討していく。まずは、藤壺に初めて母呼称が用いられる、立后の場面を見てみよう。

- ① 七月にぞ后ゐたまふめりし。源氏の君、宰相になりたまひぬ。帝おりゐさせたまはむの御心づかひ近うなりて、この若宮を坊にと思ひきこえさせたまふに、御後見したまふべき人おはせず、御母方、みな親王たちにて、源氏の公事知りたまふ筋ならねば、**母宮**をだに動きなきさまにしおきたてまつりて、強りにと思すになむありける。弘徽殿、いとど御心動きたまふ。ことわりなり。されど、「春宮の御世、いと近うなりぬれば、疑ひなき御位なり。思ほしのどめよ」とぞ聞こえさせたまひける。げに、春宮の御母にて二十余年になりたまへる女御をおきたてまつり

ては、引き越したてまつりたまひがたきことなりしかと、例の、安からず世人も聞こえけり。(紅葉賀①三四七―二四八)

桐壺帝は若宮(冷泉)を立坊させようとするが、後見するにふさわしい外戚もないため、母である藤壺を立后させて強固な後見とすることが決定される。「母宮をだに」とあることから、若宮立坊に先立って母を立后させ、母が皇女であり后であることを東宮の正統性を保障するせめてもの理由にしようとするが、「御後見したまふべき人おはせず」とあるように、その実は後見役となる外戚の不在などの不安要素を語る叙述において、母呼称が用いられているのである。

また、藤壺が弘徽殿の女御を差し置いて「引き越したてまつりたまひがたきことなりしかと、例の、安からず世人も聞こえけり」と語られている。このことから、藤壺の立后自体にも人々が批判していることがわかる。

藤壺を立后させる決定は、桐壺帝の若宮立坊に対する政治的な判断からであった。「強りと思す」、すなわち、若宮は藤壺ただ一人を後ろ盾とするのである。

ところで、この「強る」との語は、藤壺と冷泉母子に関する語であるとする植田恭代氏の指摘がある。¹⁰⁾藤壺の出産場面を、以下にあげる。

命長くもと思ほすは心憂けれど、弘徽殿などのうけはしげにのたまふと聞きしを、空しく聞きなしたまはましかば人笑はれに

や、と思しつよりてなむ、やうやう少しづつさはやいたまひける。
(紅葉賀①三二五)

ここには、若宮出産直後の心身ともに弱っている藤壺の様子と、「人笑へ」への懸念から、「思しつよる」へと、その心持がしだいに変化していく様子が語られる。この藤壺の心境を描出する語に「思し強る」との語が選び取られていることに、藤壺をめぐる言葉の特徴を読み取る植田氏の指摘には注目される。「思し強る」の語は、『源氏物語』において他には、若菜上巻に見える。

院にはいみじく待ちよろこび聞こえさせたまひて、苦しき御心地を思し強りて御対面あり。
(若菜上④四五)

「思し強る」は、藤壺の出産場面以外では、朱雀院が女三の宮のことを源氏に頼みたいと望み、思わしくない体調をおして源氏と対面するこの場面の一例が確認できるのみである。この「思し強る」の二例からは、子を想う親の強さを表わし、「強る」は若宮の強固な後ろ盾であるという、子に関する場面で選び取られているという共通点を読み取ることができる。

ただ一方では、若宮立坊に際して頼みとなるのは藤壺の存在と彼女の出自のみ、という問題もある。若宮は第十皇子であるから、他にも立太子の候補の存在を考えるのもっともである。¹¹⁾ そのような状況にあって、せめて、「母宮」を「強り」とするとの桐壺帝の判断であるが、藤壺の母呼称は、不安要素を多く孕む立后と立坊を語る叙述においてはじめて用いられていると同時に、若宮の母が后で

あるということの重要性を表わしているのである。

このように、藤壺の「母宮」は社会的立場、冷泉帝の後ろ盾としての立場を示すとともに、その立場の危うさも語る場面において用いられているのだが、このことは、賢木巻で藤壺に母呼称が用いられている次の場面において、もう一度語られている。

② 殿にても、わが御方にひとりうち臥したまひて、御目もあはず、世の中厭はしう思さるるにも、春宮の御事のみぞ心苦しき。
[母宮]をだにおほやけ方ざまにと思しおきてしを、世のうさにたへずかくなりたまひにたれば、もとの御位にてもえおはせじ、我さへ見たてまつり棄てては、など思し明かすこと限りなし。

(賢木②二三三―二三四)
桐壺帝が生前、藤壺を東宮の唯一の支えとして立后させたことを思い返す源氏の心内語において「母宮をだに」と語られている。くわえて、ここでは源氏の心内において「春宮の御事」との意識があることも確認できる。藤壺の心内に見えていた意識が、藤壺の出家を経て、源氏の心内にも見えるようになる。¹²⁾

これまでをまとめると、藤壺の母呼称は、Aのような母子の交流が語られる場面では用いられておらず、①藤壺立后(政治)、②藤壺立后の回想(政治)、③春宮元服(政治)という、政治的場面で使われているという特徴がある。藤壺に用いられる母呼称は「冷泉の母」という、藤壺の公の立場を表すものであって、冷泉帝の後見役として、藤壺の立場を位置づけるものであるといえよう。

四 母呼称と後宮政治

これまで、藤壺の母呼称が用いられる場面から、「母」が冷泉帝を政治的に支える立場にあることを、その特徴として確認した。では、他の用例はどうだろうか。藤壺の母呼称は、藤壺が物語を退場した後も語られている。用例④⑤が語られる、立后争いの場面を見てもよい。

④⑤かくて、后ゐたまふべきを、「斎宮の女御をこそは、母宮も御後見と譲りきこえたまひしかば」と、大臣もことつけたまふ。

源氏のうちしきり后にゐたまはむこと、世の人ゆるしきこえず、弘徽殿の、まづ人より先に参りたまひにしもいかなど、内々に、こなたかなたに心寄せきこゆる人々、おほつかながりきこゆ。兵部卿宮と聞こえしは、今は式部卿にて、この御時にはましてやむごとなき御おほえにておはする、御むすめ本意ありて参りたまへり。同じごと王女御にてさぶらひたまふを、同じくは、御母方にて親しくおはすべきにこそ、母后のおはしまさぬ御かはりの後見にとことよせて似つかはしかるべくと、とりどりに思し争ひたれど、なほ梅壺ゐたまひぬ。御幸ひの、かくひきかへすぐれたまへりけるを、世の人驚ききこゆ。

(少女③三〇—三二)

冷泉帝の後宮の立后争いにおいて、源氏は斎宮の女御(梅壺)を

推す。その理由として、冷泉帝の「母宮」、つまり藤壺が自らの後は斎宮の女御を後見役にと言っていたとする。それに対して、世の人々は、藤壺、斎宮の女御と、続けて皇族が立后することは好ましくないとする。

一方、藤壺の兄である兵部卿の宮の娘、王女御が后にふさわしいとする理由もまた、王女御が「母后」の血縁であり、藤壺の代わりの後見役に似つかわしいとある。

この立后争いは、「なほ梅壺ゐたまひぬ」と語られているのみで、いったい何が正当な理由であったのかについては語られないまま、結果だけが語られる¹⁴。

藤壺の母呼称が用いられたこの立后争いは、濡標巻で藤壺が冷泉帝の後宮について考えていたことと重なる部分が大きい。

入道の宮、兵部卿の宮の、姫君をいつしかとかしづき騒ぎたまふめるを、大臣の隙ある仲にて、いかがもてなしたまはむと心苦しう思す。権中納言の御むすめは、弘徽殿女御と聞こゆ。大殿の御子にて、いとよそほしうもてかしづきたまふ。上もよき御遊びがたきに思いたり。「宮の中の君も同じほどにおはすれば、うたて雛遊びの心地すべきを、おとなしき御後見はいとうれしかべいこと」と思ひのたまひて、さる御気色聞こえたまひつつ、大臣のよろづに思しいたらぬことなく、公方の御後見はさらにもいはず、明け暮れにつけて、こまかなる御心ばへのいとあはれに見えたまふを、頼もしきものに思ひきこえたまひ

て、……

(濬標②三二二—三三二)

はじめに入内した弘徽殿女御と兵部卿の宮の娘は、ともに冷泉帝と歳が近く、後見役としては頼りないが、斎宮の女御は冷泉帝と歳が離れて大人であるから、自分の代わりに後見役になってくれる、と喜ぶ藤壺の言葉である。正式な理由はともあれ、立后争いはこの時の藤壺の言葉によって、すでに決していたことになる⁽¹⁵⁾。

このように、藤壺の母呼称は、帝の後宮をめぐる文脈においても用いられているのだが、次に、藤壺の母呼称が最後に用いられる場面を見てみよう。

⑥ 「……大臣の君、父帝の御時より、そこらの女御、后、それより下は残るなく見たてまつりあつめたまへる御目にも、当代の御母后と聞こえしと、この姫君の御容貌とをなむ、『よき人とはこれをいふにやあらむとおぼゆる』と聞こえたまふ。見たてまつり並ぶるに、かの後の宮をば知りきこえず、姫君はきよらにおはしませど、まだ片なりにて、生ひ先ぞ推しはかられたまふ。上の御容貌は、なほ誰か並びたまはむとなむ見えたまふ。……」
(玉鬘③一一三—一一四)

右近が夕顔の乳母に語った会話の中で、源氏が藤壺と明石の姫君とを、美しい人と評していることを語っている。右近の言葉には、「見たてまつり並ぶるに」とあり、藤壺と明石の姫君を見比べて、との意である。続く紫の上の容貌について右近は、「なほ誰か並び

たまはむ」と、他に並ぶ人のいない、とする。源氏はなぜ、藤壺と明石の姫君を並べて評したのであるうか。右近は明石の姫君について、「まだ片なりにて」と、姫君がまだ幼いことを述べている。源氏の深意には、藤壺と明石の姫君とを並べて語ることによって、明石の姫君の「后がね」としての将来を確実なものにしたいとの思いがあるのではないか。「御母后」との呼称は、源氏にとっては姫君の「生ひ先」⁽¹⁶⁾、つまり入内、立后に向けての道筋を描く意として用いられているのではないか。これについて考えるためには、「母后」の呼称とその役割について考える必要がある。

五 母宮と母后

冷泉帝の後宮争いの場面(④⑤)から、それまで「母宮」と語られていた藤壺の母呼称に、「母后」との呼称が見えるようになる。この「母宮」と「母后」の呼称について、どのように考えればよいだろうか。『源氏物語』作中における「母宮」と「母后」の呼称の用例を、以下にあげる。

- ① ……母宮、内裏のひとつ后腹になむおはしければ、……
(桐壺①四八)
- ② 母宮をだに動きなきさまにしおきたてまつりて、……
(紅葉賀①三四七)
- ③ 母宮をだにおほやけ方さまにと思しおきてしを、……

(賢木② 一三四)

④ 母宮は、いみじうかたはらいたきことに、あいなく御心を尽くしたまふ。
(落標② 二八二)

⑤ 「……母宮も御後見と譲りきこえたまひしかば」と、……
(少女③ 三〇〇)

⑥ 宮の若君は、宮たちの御列にはあるまじきぞかしと御心の中に思せど、なかなかその御心ばへを、母宮の、御心の鬼にや思ひよせたまふらんと、……
(横笛④ 三六四)

⑦ 母宮は、今はただ御行ひを静かにしたまひて、……
(匂兵部卿宮⑤ 二二三)

⑧ 内裏にも、母宮の御方さま御心寄せ深くて、いとあはれるものに思され、……
(匂兵部卿宮⑤ 二二五)

⑨ 「……幼くて院にも後れたてまつり、母宮のしどけなう生ほしたてたまへれど、……」
(竹河⑤ 七四)

⑩ 母宮の、まだいとも若くおほどきてしどけなき御心にも、……
(宿木⑤ 四〇〇)

⑪ 母宮の御方に参りたまひて、……
(宿木⑤ 四三九)

⑫ 故院だに、朱雀院の御末にならせたまひて、今はとやつしたまひし際にこそ、かの母宮を得たてまつりたまひしか。
(宿木⑤ 四七五)

⑬ 母宮は、いとうれしきことに思したり。
(宿木⑤ 四七六)

⑭ 母宮の御もとに御使ひありける御文にも、ただこのことをなむ聞こえさせたまひける。
(宿木⑤ 四七七)

⑮ かの母宮などの御方にあらせて、時々も見むとは思しもしなん、……
(東屋⑥ 三六)

⑯ 母宮にも姫宮にも聞こえたまふ。
(東屋⑥ 九八)

⑰ わが母宮も劣りたまふべき人かは、后腹と聞こゆばかりの隔てこそあれ、……
(蜻蛉⑥ 二七二)

①は葵上の母、大宮のことで、②③④⑤は藤壺である。⑥から⑰まではすべて女三の宮に用いられた母呼称で、その多くが第三部に集中している。これらの用例から、「母宮」との呼称が用いられているのは、内親王が子を産んで母となった人に限定される。

(1) 先帝の四の宮の、御容貌すぐれたまへる聞こえ高くおはします、
母后世になくかしづききこえたまふを、……
(桐壺① 四二)

(2) 母后、「あな恐ろしや、春宮の女御のいとさがなくて、……」
(桐壺① 四二)

(3) 母后、祖父大臣とりどりにしたまふことはえ背かせたまはず……
(賢木② 一〇四)

(4) 初の日は先帝の御料、次の日は母后の御ため、……
(賢木② 一三〇)

(5) この入道の宮の御母后の御世より伝はりて次々の御祈禱の師にて
さぶらひける僧都、……
(薄雲② 四四九)

(6) 母后のおはしまさぬ御かはりの後見にとことよせて似つかはしか

るべくと……

(少女③三二)

(7)当代の御母后と聞こえしと、この姫君の御容貌とをなむ、……

(玉鬘③一一三)

(1)(2)(4)(5)は藤壺の母で、桐壺帝の先帝の後のことである。(3)は朱雀帝の母弘徽殿のことで、この時皇太后であった。また、(6)(7)は藤壺に用いられているものであるから、「母后」の呼称は、三后(太皇太后、皇太后、皇后)に立った人で子を産んだ人に用いられる呼称であることがわかる。⁽¹⁷⁾

藤壺は内親王であり、また立后しているので、「母宮」「母后」と二つの母呼称が用いられていることがわかる。これが、藤壺の母呼称の特徴である。④⑤の立后争いの場面で用いられた二つの母呼称は、同じ母呼称の羅列を避ける意があると考えられるが、もう一つ、王女御を立后させたい兵部卿の宮が、自身の母が「母后」(桐壺帝の先帝の后)であり、自身の妹が「母后」(藤壺)であることを、自信と誇りをもって意識しているものであるといえよう。

では、史実において「母后」と呼ばれる人物はどのような存在だったのか。このことを確認するために、「母后」の政治的な機能について押さえておきたい。

「母后」が政治的にどのような立場にあったのかについては、古瀬奈津子氏の論考がある。⁽¹⁸⁾古瀬氏は、藤原詮子や藤原彰子について、兼家の意志によってなされた太政大臣任命が、「母后命」と「小右

記」に記されていることや、威子の立后について彰子が道長に提案していることなど、「母后」は内裏において、幼少の天皇を後見、補佐する役割を有していたと考えられ、これは撰関とは別の政治機能であったことなどを指摘する。さらに、服藤早苗氏は、詮子や彰子についての史料から、国母が政務に関わっていたことを指摘し、「人事・儀式・財産・キサキ決定などに発言権」を持っていたとする。⁽¹⁹⁾

なお、藤原氏におけるこのような「母后」の政治への関与は、藤原穩子とその端緒とされるが、この藤原穩子の入内については、『御産部類記』所収の『九曆』逸文(天曆五年六月十五日条)に、以下の記事がある。⁽²²⁾

但延喜初皇太子(保明親王)四年十一月晦日降誕、至于明年正月公卿上表也、幼稚皇子雖無表例、至于此般、頗有内謀云々、其故者、⁽²⁰⁾延喜(醍醐)天皇始加元服之夜、東院后(班子女王)御王妃内親王(為子)并今太皇太后(藤原穩子)共欲參入、而法皇(宇多)承母后(班子女王)之命、被停中宮之參入也、其後彼妃内親王不幾而依産而薨、其時彼東院后宮聞浮説云、依中宮母氏(人康親王女)之冤靈、有此妖云々、⁽²¹⁾因之重可被停中宮之參入云々、而故贈太政大臣(時平)左右廻令參入也、

これは藤原師輔が村上天皇に、皇太子を早々と選定した先例について奏上した内容を記したもので、傍線部①にある部分では、宇多天皇の皇子である醍醐天皇の元服に際して、宇多天皇の母である班

子女王が、わが子為子内親王を入内させる一方で、藤原穩子の入内を停めさせたとある。その後、為子内親王が出産によって亡くなり、それが穩子の母の呪詛によるものであるという噂に班子女王が接したことから、傍線部②にあるように、重ねて穩子の入内を停めさせたとある。ここでは、班子女王が孫、醍醐天皇の後宮のことに介入しており、班子女王が入内に関して発言、命を下していた。『九曆』は、このような班子女王を「母后」と示していることがわかる。⁽²³⁾

ところで、穩子については、①の紅葉賀卷の藤壺立后の理由を語る文脈に「強り」とあることに着目し、藤壺の立后を穩子の立后の史実と重ねる読みの指摘が福長進氏にある。⁽²⁴⁾

『日本紀略』から、延長元年四月二十六日条の記事をあげる。⁽²⁵⁾

廿六日庚午。以女御從三位藤原朝臣穩子為中宮。前皇太子之母也。穩子の立后は、孫である慶頼王の立太子の直前であり、穩子は慶頼王の父である保明親王の生母として中宮に冊立された。これには、保明親王を「みなし天皇」とすることにより、慶頼王立太子の正統性を示す意図があったという。⁽²⁶⁾ここに、紅葉賀卷の立后と立坊を考へ合わせると、穩子と藤壺が中宮に立てられた意味が「強り」という意味をおして響き合くと、福長氏は述べる。やはり、藤壺が東宮の母として立后したことは、中宮として後見となるとの意が大きいと考えられる。

話を戻そう。これまでをまとめると、「母后」は政治的な発言権を持ち、入内や立后などに際して政治的な判断、発言をしていた

ことが確認できる。

では、この「母后」のありよう⁽²⁷⁾と藤壺とを重ね合わせる時、そこから何を読み取ることができようか。

「母后」は入内や立后についての判断を下す。藤壺を示す⑤⑥の「母后」は、その背後に立后が関わる文脈で用いられているのではないだろうか。⑤は立后争いを語る描写の中にあり、⑥は源氏の意識の中に、明石の姫君を「后がね」として養育する、つまり立后させたいとの思いが見え隠れしている。

兵部卿の宮の娘王女御は冷泉帝の後候補として、冷泉帝の母方と血脈を同じくする。だから、「母后」に「ことよせ」るのである。

さらには、明石の姫君は后がねとして育てられており、母方の「劣りの血」の不安があるが、「当代の御母后」と並べられることにより、「生ひ先」、つまりは入内、そして立后を意識させるのである。右近が「かの後の宮をば知りきこえず」と語るのは至極当然だが、「見たてまつり並ぶるに」と並べられることが重要なのである。藤壺にとつては、「母后」と並べられることが重要なのである。藤壺に用いられた「母后」との呼称は、史実に認められる「母后」と同じく、社会的地位と政治的な機能を有しているといえよう。⁽²⁸⁾

六 藤壺の変貌

ここで今一度、③の冷泉帝元服の場面について考えたい。藤壺が

「母」と呼ばれる文脈には、どのような意味があるのだろうか。藤壺に用いられる母呼称には、

・冷泉帝に関わる政治的な場面

・公の立場に関する内容が語られる場面

を、その特徴としてあげることができる。さらに、個別の場面で検討したように、冷泉帝の後ろ盾、後見役として語られることが多い。これは「母宮をだに」とあるように、冷泉帝にとっては、藤壺が「母」であることが最も重要なことであるからに他ならない。ただし、藤壺が冷泉帝の母であることは、源氏との関係なくしては成り立たないことも看過できない問題である。

四月に内裏へ参りたまふ。ほどよりは大きにおよすけたまひて、やうやう起きかへりなごしたまふ。あさましきまで紛れどころなき御顔つきを、思しよらぬことにしあれば、また並びなきどちはげに通ひたまへるにこそはと思ほしけり。いみじう思しかしづくこと限りなし。源氏の君を限りなきものに思ほしめしながら、世の人のゆるしきこゆまじかりしによりて、坊にもえ据ゑたてまつらずなりにしを、あかず口惜しう、ただ人にてかたじけなき御ありさま容貌にねびもておほするを御覧するまゝに、心苦しう思しめすを、かうやむごとなき御腹に、同じ光にてさし出でたまへれば、瑕なき玉と思ほしかしづくに、宮はいかなるにつけても、胸の隙なくやすからずものを思はず。

(紅葉賀①三二八―三二九)

これは、冷泉が初めて藤壺と共に参内した際の描写である。「ほどよりは大きに」「光」と、彼の美質を語る表現がある。この美質は、③の滯標卷の元服を語る叙述にも認められる一方、藤壺の心中は休まることのないとも語られており、源氏に似ているという描写は、たとえばAの場面で確認したように、冷泉帝の立場の安泰にとつての大きな問題として、藤壺が抱えてきたものであった。

対して③の元服を語る叙述は、源氏と冷泉東宮の酷似が賛美される文脈で、二人の容貌の酷似は「光りあひたまへる」とされ、ハレの場を語る言葉の中にある。ここには冷泉東宮の立場の不安なことは語られていない。その中であって、「母宮」だけは、源氏と冷泉東宮の酷似の理由を知る人物として、「いみじうかたはらいたきこと」と大変に心の痛い思いを抱えたままである。このような藤壺の心中を、語り手は傍線部で「あいなし」と評している。「あいなし」は今さらその心配はないとする意で、これまでの父子の酷似を心配する藤壺の心中を語る叙述には見られないものである。藤壺一人を後ろ盾として何とか持ちこたえてきた不遇の時代は過ぎ去り、冷泉帝の世の到来が確実だからであろう。語り手が「あいなく御心を尽くしたまふ」と評すとおり、以後、藤壺の心内において父子の酷似や密通の露呈を心配する様子は語られない。ここを境として、藤壺は政治家としての顔を見せるようになるのである。つまり、不安を抱えながら冷泉帝の安泰をかううじて守りぬく母から、冷泉帝の後宮を堂々と動かしていく母へと変貌していくのである。

おわりに

賢木巻で冷泉東宮を取り巻く情勢が不安定だった際、藤壺は「宮の御ため」、源氏には「春宮の御事」との意識があった。ここからわかることは、藤壺と源氏、それぞれがわが子への思いを抱いているということだが、まだ幼く、廃太子の危惧もあつた冷泉を守りぬくというこの意識は、須磨巻まで見受けられ、これは藤壺と源氏に共有されるものである⁽³¹⁾。しかし、源氏の帰京後、その危惧は払拭され、藤壺と源氏は、共に冷泉帝の聖代を支えるという役割を担っていく⁽³²⁾。

藤壺に用いられた母呼称は、冷泉帝の母であるということを示すとともに、内親王であり、立后した母であるという、彼女の社会的地位を表わすものでもある。母としての藤壺は、源氏の須磨、明石への流離を経て、しだいに政治家としてのしたたかな面が語られるようになり、藤壺退場後も、藤壺の母呼称は政治の場で用いられている。このような藤壺の母呼称の特徴は、作中における藤壺の母としての役割を語るものとして機能しているのである。

注

(1) 清水好子『源氏の女君』（塙書房、一九五九年）。

(2) 玉上琢彌『源氏物語評釈』の「人物総覧」を参照した。

(3) たとえば、わが子のためを思う母としてのありようについては、

沢田正子「源氏物語の母」（『源氏物語の探求六』風間書房、一九八一年）が、自らの出家により、源氏の父性愛のみを強く繋ぎとめたとし、今井久代「東宮の御ため」の論理―藤壺の運命と桐壺帝（『源氏物語構造論―作中人物の動態をめぐって』風間書房、二〇〇一年、初出一九九八年）は、桐壺帝の遺言を守り冷泉帝の即位を果たすことが藤壺の贖罪であると述べる。

さらに、わが子のために出家し「祈る母」となる藤壺については、鈴木裕子（母）の物語の始発」（『源氏物語』を（母と子）から読み解く）角川書店、二〇〇五年）が、自らの意志でその道を選び取ったと述べる一方、中村成里「源氏物語論―藤壺という「母」の肖像」（『物語研究』第三号、二〇〇三年三月）は、母としての藤壺は犠牲的に機能していると論じている。これらは藤壺の母としての生き方に関わる指摘である。

(4) 当該歌の解釈については、池田節子「源氏物語」における母の存在感―「母」呼称を中心に―（『源氏物語の表現と儀礼』翰林書房、二〇二〇年、初出二〇〇三年）において、完了説と打消説の変遷について整理されている。なお、鈴木裕子論文前掲注3に同じ）や中村論文（前掲注3に同じ）は、完了説を取る。

当該歌の解釈は慎重を要するが、たとえば、加藤睦「源氏物語」の和歌を読む（一）（『立教大学大学院論叢』第九号、二〇〇九年八月）が、藤壺の返歌は、源氏の歌にある若宮に対する思いや、藤壺と共有される苦悩を詠んだものを、素直に返している、つまり源氏の詠歌に対して何か切り返したりする必要性は認めにくいとして打消説とする。一方で鈴木宏子「源氏

物語の和歌」(『新時代への源氏学』5構築される社会・ゆらぐ言葉) 竹林舎、二〇一五年)は、『古今和歌集』における「なほうとまれぬ」の用例との比較から、完了説とする。このような解釈の揺れは、藤壺所生の若宮が不義の子であることに起因すると考えられるが、このような問題を抱えていることが、藤壺の母としての存在そのものにも大きく関わっていると見えよう。

(5) 池田論文(前掲注4に同じ)。

(6) 拙稿「源氏物語」明石の君と「母」の空白―海幸山幸神話との比較から(『物語研究』十八号、二〇一八年三年)。

(7) 藤壺と源氏の意識に見える、「宮の御ため」や「春宮の御事」との語については、今井久代(前掲注3に同じ)に詳しい。藤壺は「東宮の御ため」の意識をしだいに源氏にも受け入れさせ、藤壺のみに見える「御ため」や「御事」の語が、源氏の心中にも見出せるようになることを指摘する。

(8) 源氏と冷泉帝の容貌の酷似が、密通の罪を示すとの指摘は、立石和弘「冷泉帝の顔―供儀と玉鬘の視線から」(『中古文学』五七号、一九九六年三月)の述べる通りである。

(9) 篠原昭二「源氏物語」と歴史意識―冷泉院をめぐる―(『源氏物語の論理』東京大学出版会、一九九二年、初出一九九一年)は、冷泉帝の立坊を史実と照らし合わせて、『源氏物語』の時代においては、内親王腹の皇子が希少かつ危ない存在であったと述べ、「藤壺の中宮腹の皇子が皇太子に立ち、やがて即位することこそ全くの異例であった」と指摘する。

(10) 植田恭代「藤壺の心とことば―『源氏物語』紅葉賀巻の出版面から」(『源氏物語 煌めくことばの世界』翰林書房、二〇一四年)。

(11) 篠原論文(前掲注9に同じ)は冷泉帝について、源氏や朱雀帝と比べると、物語に直接語られることが極めて少ないことを指摘し、その背景に「語り手の言及を避けた政治の世界が浮き彫りになる仕掛けになっている」と述べる。また、小嶋菜温子「語られない産養(2)―(罪)の子・冷泉帝の立坊争いと童舞」(『源氏物語の性と生誕』立教大学出版、二〇〇四年、初出一九九九年)は、篠原論文を支持する立場から、冷泉帝立坊に關する語りの問題に言及する。くわえて、紅葉賀巻の童舞の叙述から、立坊の有資格者は桐壺帝の第十皇子の冷泉帝だけではないことから、冷泉帝の立坊は決して盤石ではないことを指摘する。また立坊の後も、権勢家の外戚のいないことがくり返す語られることから、「藤壺とその皇子の地位は、立后・立太子の後も、きわめて不安定要素を孕んでいたのだ」と述べる。

(12) 今井論文(前掲注3に同じ)。

(13) 小嶋菜温子「語られない産養(3)―明石の姫君の五十日・袴着・裳着、そして立后」(『源氏物語の性と生誕』立教大学出版会、二〇〇四年、初出一九九九年)は、秋好中宮(斎宮の女御)の立后に際してその問題の在り処が語られないように、明石の姫君の立后の際もまた、二代続けて源氏が入内させた人物が立后することが問題とされている。このような語りは、本題からずらして語る方法であり、これによって問題が表面化せず立后が実現すると指摘する。

(14) 立后争いの語りに言葉に注目してみると、源氏の主張は「ことづく」と語られ、兵部卿の宮の主張は「ことよす」と語られているが、類似した意味を持つ二つの言葉がそれぞれに配されて

いる意味は何だろうか。

『源氏物語』における「ことづく」については、落谷雄輝「葵巻の光源氏と六条御息所―「ことづく」の織りなす関係性―」『立教大学日本文学』一一五号、二〇一六年一月）や、同『源氏物語』における規範の諸相―「ことづく」をめぐる―」（『物語研究』一六号、二〇一六年三月）に、その機能や意味に関する指摘がある。落谷氏が「ことづく」ことよって目的が達成されるという物語における機能について言及しているとおり、源氏方に「ことづく」の語が用いられていることにより、源氏方の目的が達成されることを示していると考えられる。

(15) 湯浅幸代「『源氏物語』の立后と皇位継承―宇治十帖の世界へ―」（『源氏物語の史的意義と方法』新典社、二〇一八年、初出二〇一六年）は、『源氏物語』においては、立坊の問題よりも立后争いが語られているとし、冷泉帝の後宮争いは、藤壺の意向が反映されていると指摘する。

(16) 青木慎一「明石姫君の「生ひ先」―「松風」・「薄雲」巻に着目して―」（『源氏物語の表現と絵画的展開―夕霧を中心に―』武蔵野書院、二〇一九年、初出二〇〇八年）は、明石の姫君に用いられる「生ひ先」の語には、源氏や明石の君、明石の尼君など、養育する人物たちの思惑の中に置かれ、明石の姫君の立后へと、その意識を向かわせる意が読み取れると指摘する。

(17) 作中でもう一人、立后しているのが明石の中宮である。しかし、彼女は「母」と呼ばれていない人物なのである。これについて池田氏は、「明石の中宮が、匂宮の母であるだけでなく、中宮という地位にあることが、「母」呼称のない理由なのではなからうか」（前掲注4論文）との見解を述べている。作中に

おける明石の中宮の主な呼称には、後の宮、宮、后、大宮などがあり、「宮」とも「后」とも呼ばれているが、「母」との呼称は確認できない。宇治十帖の世界における、明石の中宮の特徴、あるいは立場と母呼称の問題については、今後の課題としたい。

(18) 古瀬奈津子「撰関政治成立の歴史的意義―撰関政治と母后―」（『日本史研究』第四六三号、二〇〇一年三月）。母后の政治的機能は、藤原撰関政治の隆盛と関わって増大していったと述べている。

(19) 服藤早苗「国母の政治文化―東三条院詮子と上東門院彰子―」（『平安朝の女性と政治文化―宮廷・生活・ジェンダー―』明石書店、二〇一七年）。詮子や彰子に見られる国母が政治的な発言権を有していた背景には、貴族社会に定着していた家父長制的父母子秩序があり、貴族社会から承認された政治文化だったと指摘する。なお、服藤氏には、「王権と国母―王朝国家の政治と性―」（『平安王朝社会のジェンダー―家・王権・性愛―』校倉書房、二〇〇五年、初出一九九八年）において、天皇の母である藤原穩子や詮子、彰子の政治的後見力についての指摘がある。

(20) 朱雀天皇の譲位は藤原穩子の発言によるものであったことが、『大鏡』（新編日本古典文学全集 三七八―三七九頁）に見える。穩子の国母としての影響力については、角田文衛「太皇太后穩子」（『紫式部とその時代』角川書店、一九六六年）や、藤木邦彦「藤原穩子とその時代」（『平安王朝の政治と制度』吉川弘文館、一九九一年、初出一九六四年）などに詳しい。

(21) 古瀬論文（前掲注18に同じ）や、同『撰関政治』（岩波書店、二〇一一年）。

(22) 引用は、史料編纂所編『大日本古記録 九歴』(岩波書店、

一九八四年)に拠る。()内は傍注を、()は割注を示す。

(23) 『九歴』の傍線部①は、寛平九年(八九七)七月三日のこと

で、この時点では、班子女王は皇太夫人ではあるが后ではなく、后になるのは、それから一〇日後の寛平九年(八九七)七月十三日、醍醐天皇の即位に伴って皇太后となった時である。また、為子内親王が出産に際して亡くなったのは、昌泰二年(八九九)のことであるので、傍線部②の時点では、班子女王は既に皇太后となっている。

皇太夫人は、天皇の生母に与えられる称号であった。皇太夫人については、春名宏昭「皇太妃阿閉皇女について―令制中宮の研究―」(『日本歴史』五一四号、一九九一年三月)が、大宝令における皇太妃の規定について、皇太妃や皇太夫人は日本独自の規定であることや、皇太夫人が天皇の生母である場合においては、天皇大権を代行する機能があったことなどを指摘する。さらに、服藤早苗「九世紀の天皇と国母―女帝から国母へ―」(『物語研究』三号、二〇〇三年)は、国母が天皇を補佐する体制を臣下が認識しており、この国母の機能を背景として、国母の父や兄弟が天皇権を代行する摂関政治が始まったことを指摘する。

『九歴』が傍線部①でまた皇太后になっていない班子女王を「母后」としているのは、数日の違いはあるものの、班子女王が皇太后となったのが寛平九年七月であったことに加えて、班子女王が后と同様に天皇を政治的に補佐していたからであろう。

(24) 福長進「冷泉立太子と藤壺立后」(『文学』第十六卷第一号、二〇一五年一月)は、「強り」の語に着目し、藤壺の宮の立后

を、延長元年、慶頼王(父は保明親王)の立太子の直前に藤原穩子(保明親王の生母)が立后した史実と重ね合わせて検討する。

(25) 引用は、黒板勝美編輯『新訂増補 国史大系 第十一卷 日本紀略 後篇 百鍊抄』(吉川弘文館、二〇〇〇年)に拠る。

(26) 瀧浪貞子「女御・中宮・女院―後宮の再編成―」(『論集平安文学 第三号』勉誠社、一九九五年)。

(27) 湯淺幸代「朱雀朝の「摂関政治」―摂関と母后の位相・関係性から―」(注15に挙げた『源氏物語の史的意義と方法』、初出二〇〇六年)や、湯淺論文(前掲注15に同じ)は、天皇を補佐する摂関政治や母后の史上の例と、『源氏物語』における朱雀朝や冷泉朝とを重ね合わせて検討する。

(28) 小嶋論文(前掲注13に同じ)。

(29) 湯淺論文(前掲注15に同じ)は、秋好中宮(斎宮の女御)の立后の意味するものについて、「藤壺が自身の代わりとなる後見役を期待する点では「母后」たる役割を担っていたと考えられる」と述べている。

(30) 源氏と冷泉の容貌の酷似が描出する、源氏と藤壺の罪。これは冷泉を語る叙述において、しばしば「瑕」との語として表れているものであるが、この冷泉をめぐる「瑕」の語も、源氏の須磨・明石流離を経た後は見受けられなくなる。代わりに、明石の姫君をめぐる、その母方の血筋を懸念する意としての「瑕」の語が見出せるようになる。このような冷泉の不安要素を表わす表現が収斂される問題と、③の「あいなし」との評は無関係ではないと考えられる。

(31) 今井論文(前掲注3に同じ)。

(32) 高橋麻織「冷泉帝の元服―摂政設置と后妃入内から―」(『源氏物語の政治学―史実・准拠・歴史物語―笠間書院、二〇一六年、初出二〇〇八年)は、濤標卷の冷泉帝元服から、源氏の政治家としてのあり方について言及するが、藤壺の政治家としての語られ方についても、濤標卷の冷泉帝元服を始発とすると考えられよう。

※『源氏物語』本文は『新編日本古典文学全集』より引用した。()内は、巻名・巻数・頁を示している。

(おおたけあかり 大学院博士後期課程在学学生)